

歴史の教師は子供たちに何を伝えたいか

渡 辺 賢 二 氏

渡辺氏は、法政大学第二高等学校教諭、川崎地域史研究会会員でもあり、長らく歴史教育者協議会の平和教育分科会の世話人をつとめられている。最近では『子どもの見方・授業のつくり方』（教育史料出版会）などの著作をだされるなどの活躍をされている。今回は、多くのプリントや様々な実物資料を示しながら歴史教育の最近の動向もふくめてお話をいただいた。以下はご講演の概略である。

最初に歴史教育とは教育のなかの限定された部分の実践であるとおさえた上で、まず教育を行うための3つの柱について、①文化の継承・発展、②自立を促す作用、③真実・真理の獲得による人間形成というかたちでまとめた。

そしてそうした観点にたつて、歴史教育のあり方をめぐる二つの傾向について検討を加えてみる。ひとつめは「はたして歴史とは覚えるものだろうか」という点である。歴史は覚えるものであるという学習観は戦前と戦後それぞれに根拠がある。戦前については、歴史のスケールを天皇の代でしかはかれないようにした神話教育、考えることや疑うことを許さず「疑うよりも覚えること」を強調する「真理・真実を軽視と排除」した国史教育がつくったものである。一方、戦後になっても教科書中心主義の傾向は克服されず、「覚える」という根底は変わらず、その傾向を受験教育が増幅させていくし、学界の成果を面的に解釈して教材化していくいわゆる「進歩的暗記主義」という傾向もあらわれるにいたっている。

ふたつめは最近、歴史教育において強調されている討論形式の授業に関連して、はたして講義式授業は全て否定すべきことかどうかという点である。ここで問題になるのは、科学的認識との関連であ

り、すなわち真実・真実をどうおさえるかということである。現在提起されている「講義方式を否定し、討論形式に」という授業方法の多くは、「仮設的推論」から『機能的推論』、そして『演繹的推論』という知的体験が大切だという論理構造をもち、それはデュイの教育論、すなわちプラグマティズムの発想が基盤にあると思われる。この場合に問題になるのは、討論だけで子どもの認識が深まるのか、もっと言えば教師の教材論がからまないと科学

的認識が獲得できるかという疑問である。ここで、遠山茂樹氏の一連の教育についての提起の重要性を指摘したい。遠山氏の提起によれば、小・中・高校のそれぞれの段階で歴史に対する科学的な考察を獲得させることは可能である。そして、その時に「『実感』を大切にしつつ、史料をあつめ、これを批判し、そこから史実をひきだし、その史実を他の史実と関連させ、総合的・発展的に理解する。…こうした過程を子ども達に指導して体験させる」ことが重要であり、この「実感」と「歴史認識」のへだた

りを埋めていくことが教師の仕事である。そこでこのへだたりをうめるための私自身の教育実践をいくつか紹介してみる。そのさい特に日本近現代史の授業づくりを中心として重要なこととしては、①通史を教えることの重要性、②社会のしくみがわかるようにすること、③民衆のすがたがうかがいあがるようにすること、④戦争と平和の問題を民族の自立・連帯とのかかりで深めること、⑤戦後史を重視することなどをあげたい。そのうち特に②と③に關わって、歴史教師の本格的な研究や発掘に裏付けされた「教材の質と体系化の必要性」を強調したい。具体的な教材については『歴史地理教育』誌上に連載した「実物資料で展開

する十五年戦争学習」（全一八回）を参照してもらいたいが、例えば国家総動員法といっても今の子どもたちの「実感」とその実態はあまりにかけはなれている。そのため、「キンダーブック」や徳川家康の銅像まで戦場に出兵させる姿、当時の「体力手帳」を示すなど、様々な実物や教材を教室に持ち込み、子どもの「実感」を科学的な認識に裏付けされたものにしていくことが重要である。

また、子どもたちは「真実を自ら学んだ時に」成長するものであり、歴史を体験することで科学的認識を獲得していく。そのことは、陸軍登戸研究所の調査に参加した長野県の赤穂高校平和ゼミと法政二高平和研究会の子どもたちとの活動の中で明らかになった。調査に加わった高校生たちに感想を聞いてみると、それは以下の三つに分類される。①「普通の人間、科学者が悪魔に変わるのが戦争だ」、つまり戦争の仕組みを実感したということ、②その悪魔の体系が戦後に引き継がれていく恐ろしさ、③どうしたらそうした現代戦の構造をなくすることができるか。特に三点目で明らかのように、子どもたちは陸軍登戸研究所の調査を通して得た太平洋戦争の仕組みをわかるといふことをさらに乗り越えた認識を獲得している。つまり、子どもたちは学ぶことによって自分自身を変えていき、その作業を通じて教師が与えたもの以上に成長していく。その点に確信を持つことが重要である。

以上の話をまとめると歴史の教師が心掛けなければならない点として、自分自身が常に教材研究を行っていかなければならないが、特に①歴史学の現在の水準に謙虚に学ぶこと、②歴史学の成果をそのまま子どもに示すのではなく「教材化」する作業をしなければならぬ、③生徒の認識から学び自分を変えていかなければならないという三点を強調しておきたい。

以上の講演を受け質疑応答では、討論形式の授業への疑問く討論授業は「考える」ことの強制ではないかや、みずからの授業の平板さへの反省の声などが出され活発な議論が交わされた。

（大湖賢一）

